

山口文象＋初期RIAアーカイブサイト資料

伊達美徳 著

1949～78年

山口文象戦後詳細年譜

「新編 山口文象 人と作品」(伊達美徳著、2003年 アール・アイ・エー発行)より、「止揚の時代」部分を抜粋、ただし写真を省略した

止揚の時代

戦後の再出発は難航した。事務所のスタッフは復員してきても、仕事はなく、とうとう1949年には解散に追いこまれた。

山口は、建築家から運動家にまたち戻って再出発の道を探る。そして建築家と運動家との止揚を図ろうとして、二つの組織を起こすのである。

そのひとつは、1950年に猪熊弦一郎らと図つて、美術団体の新制作協会に建築部会を起こすのである。

もうひとつは、その翌年に若い建築家たちと協働して仕事をする場、「RIAグループ」を結成するのである。

前者は、美術、工芸デザイン、建築等を横に結んで、運動家山口文象として外に広がる世界であった。

これに対して後者のRIAは、手も口も達者な建築家の若者たちを率いて縦に結んで、建築家山口文象として再出発する内にひろがる世界のはずであった。

そのRIAグループを率いて社会に訴える第一弾が、正札つきの現物建物として新制作協会の展覧会に出品した「ローコストハウス」であった。これをもって運動家であり建築家である山口文象を、ひとつのパス・ペクティブに見事におさめてみせたのである。

こうして山口の戦後は、ようやくそして意気揚揚と出発した。

RIAグループは、かつての山口の師・グロピウスが、

亡命先のアメリカで組織した「TAC」（1949年）を模して、あるいは啓発されて結成したことは確実である。協働体としての建築設計組織を標榜して、戦後アモクラシーのモデルでもあった。その故に建築運動としての動きをもつことになり、運動家・建築家山口文象にとつて、1950年代は止揚をとげて、30年代と並ぶもうひとつのピークの時期であった。

しかし「グループ」は組織として動きを持ち、やがて「株式会社建築総合研究所」となっていくと、組織自体として自律的に成長をとげるのは自然のことである。

1960年代に入ると、高度成長社会の中で建築運動は行きづまりをみせ、設計組織として体制がととのえられてくる。手練の建築作家としての自己と、組織体の長としての立場の間で、さらにこのころからはじまる宿痾とともに山口文象の新しい相剋がはじまる。

そこで、病に小康をえた1970年代から、自分はやはり作家としてもものをつくらう、いわば1940年代への回帰をはかるうと、再試動をはじめたころの初夏のある日、20世紀とともに歩んだ76年の鼓動は卒然として止んだ。

山口文象の戦後最大の作品「RIA」は、近藤正一に率いられて「(株)アール・アイ・エー」に成長していく。

1949年 昭和24 47歳

山口文象建築事務所を解散(2月ごろ)

事務所解散時の事情について、山口は後に語っている。
(31)

「私が戦前からやってきた山口建築設計事務所をどうしてやめたかという点、終戦後、つまりまず第一番の旗じるしが進駐軍の仕事をしないうということ、それから防衛庁の仕事をしないうこと。それから、その当時ヤミで儲けた人たちがキャバレーをこさえたなんかして……そういうものを拒否しちゃったわけですよ。」

その拒否したばかりでなくて、私の経営能力というのが非常に弱いんですよ。……非常にへたなんです。だから仕事だんだんなくなっちゃってきて、本当に尾羽打ち枯らし……差し押えは3度ぐらくちやいました。……そのうえ丸の内事務所が接収されたので、そこら軒々として、ここへ仕事を頼みに来ると、そういうのは困ると私はことわるでしょう。……山口建築設計事務所は戦時中26人いたんですが、それがだんだんめしが食えなくなってくる。それから終戦後、二・一ストをピークとして、つまり共産党の華やかなりし時代ですね。それでうちの山口事務所の人たちも必然的に傾斜していった。……そこに久ヶ原教会の仕事が来たんです。そのほかにも住宅もくるんです。すると、この住宅はどこどこ

の会社の重役のだから、そんなものやれるか。という説が出てくる。じゃ久ヶ原の教会はどうか、これは宗教は阿片だからわれわれのやるべきものじゃないということで拒否される。……経済的にだめになって、払えなくなっちゃったんです。そのうちにみんなやめちゃって、退職資金なんかうちのものを全部売っても出せない仕末でした。それで私ひとりになっちゃったんですよ」

事務所解散にあたって、青写真コピーで2分冊の「山口文象建築事務所設計工具寄宿舎平面計画集成」を編集して所員に配布した。

新制作協派会に建築部を設立して参加

この年、猪熊弦一郎らと図って、美術団体の新制作派協会に建築部(後にスペース・デザイン部)をつくった。新制作派協会は、1934年に内田巖、佐藤敬、猪熊弦一郎、小磯良平らが、洋画の国家統制に抵抗して結成した美術家団体であった。そのリーダーだった猪熊は、回想して言う。(49)

「新制作のことといえば、ちょうど文ちゃんが高松近代美術館や久ヶ原教会をつくっていたころ、僕は新制作の中に建築部がなくてはいけないと主張した。そして、まず誰を集めようかということ、文ちゃんに相談した。その結果2人で、丹下健三君、池辺陽君、前川さん、それから谷口吉郎さん、吉村順三さんと岡田哲郎さん、剣

持勇君、それに文ちゃんど、その時代のトップ級のアーティストを選び出した。この建築家たちが、次の時代のイニシアティブをとるだろうと僕は考えた。1949年（昭和24年）のことだった。しかし、僕がそうできたのは、その裏に文ちゃんがいたからである」

★写真…早川巍一郎邸（235P）

●作品…早川巍一郎邸（東京・練馬）

●講演…「創子社建築会について」（10月21日 明治大学講堂 N A U 歴史部会主催の「日本近代建築運動史講座」第2回講演会）

1950年 昭和25 48歳

新制作派協会で神戸博覧会の施設を設計し、山口は

「ゲート」と「序曲館」（木造シェル構造）を担当した。

★写真…新制作の仲間たちと（236P）、久が原教会（RIA）、神戸博覧会ゲート（現代日本建築家全集11、187P）

●作品…千葉邸（12月 新宿「新建築」54・3月号）、神戸博覧会序曲館（神戸市、「建築文化」50・6月号）、久ヶ原教会（東京・大田区、「新建築」50・9月号）、高林邸（東京・渋谷、「新建築」50・6月号）

●座談…「デザインと構造に関する座談会」（「建築文

化」10月号）

1951年 昭和26 49歳

この頃から共同設計組織について模索

後に山口は、RIA結成に関してこう語っている。

(21)

「（事務所を解散して）それで私いろいろ考えたわけですよ。……建築というものはやっぱり自分だけの才能で頑張つて実際いいものができるかというと、今まで建築事務所を独立してやってみた自分の経験からいつて、何か矛盾するんですね。これはやっぱり共同で設計し、共同作業で建築というものはできあがるんじゃないかというふうには私は私なりに考えたわけです。……それから、従来の事務所のようにひとりで儲けるんじゃないかと多勢で儲けたらいいじゃないかということ。……本当に優秀なタレントといっしょに仕事ができれば、自分も育つし、その人も育つし、また新しい組織の形体ができてくるんじゃないかという、そういう意欲があつたんですね。……名前を Research Institute of Architecture とするのがイニシアトルとればRIAで語感もいいし、これが一番いいだろうと思ってきめたのが、11年前（编者注…1951年にあたる）の8月から9月ごろです。（このころは）まだひとりですよ。」

●著述…アンケート「1951年を送るにあたって」
〔「新建築」12月号〕

1952年 昭和27 50歳

RIAグループを結成

山口のもとに三輪正弘と植田一豊の加わるRIAグループの動きが始まった。後に山口は語っている。(51)

「そのころ新建築の編集をやっていた三輪君がよくだべりに来てましてね、植田一豊という優秀なのが九州に居るから呼んだらどうかといってくれたんです。……2、3べん手紙の往復をしたかな……必ず一緒にやってみようからという約束をして、仕事を待っていた。

それでこんどは大久保という人が住宅を建てたいと……今の金にすれば200万か250万円ぐらいですね。これがひとつ来たわけです。……私がスケッチして、植田君もやって来たりなんかしてはじめたわけですよ。……そしてあれが第一作としてでき上がったわけですよ。それから大阪の堺の日本製糖……一億いくらだったかな……それからまあ本格的RIAがスタートしたわけですね。

そこへ三輪君が「新建築」の編集をやめてはいって来た。植田君から半年か一年遅れたかな。それからこんどまた一年ぐらい遅れて近藤君がはいって来た。近藤君が

はいって来たのは、猪熊君が、こんど早稲田を出る人で、自分の洋画研究所にいる近藤君というのが、どうしても山口のところへ行きたいからなんとかしてくれないかという事です。はじめの出版はそういうことです。」

RIA創設の山口の相棒となつた三輪正弘は書いている。(52)

「RIAという名称は、このグループのリーダーとなつた山口の苦心作であつた。Rはresearch、Iは

instituteだから、まあいつてみれば建築調査研究所ということになるうか、会う人ごとに意味をきかれて出まかせの返事をしてるうちに、何となくイメージが私なりにできあがつてしまった。……instituteはデザイン研究の内的な分野であり、チームのdiscussionをその中枢としていること、researchは足を使い歩きながらのデータ集積や多くの階層職種の人々との交渉ということではないか、と自答する格好になつてきたのだつた。

この設計協同のチームのイメージは、戦前から続いていた山口文象事務所を解散した山口が、一人黙居し沈潜していた時期に、いわゆるアトリエの事務所をアウフヘーベンするものとして目論まれたものだが、ベルリン時代山口の師であつたグロピウス教授がアメリカで試みたTACのイメージがあつたことは想像にかたくない」

創立メンバーの三輪正弘、植田一豊と近藤正一（現アール・アイ・エー会長）の3人は、後年になつて座談会

でR I A創立時を次のように語りあう。(6)

三輪「ぼくが山口先生を知ることになったのは、画家猪熊弦一郎さんの研究所に学生時代から通っていて、学校を出てから『新建築』の編集に…神戸博のときに、ぼくは『新建築』の一編集員として取材にいつているわけです。そのへんから山口先生との交流が始まっていったと思います。それで久ヶ原教会の計画段階からみせていただくとような機会があつて、何べんもいつているうちに…。

私が久ヶ原のお宅に通っている間に、R I Aというものを考えていると、ふともらされた。バンハード・ゴチックという活字でR I Aと3文字…おれはこういうことを考えているんだ、と。当然のことながら、グロピウスのアメリカでのT A C…をフィーチャーして、という面は一応あつたようにぼくは思います。しかしながら、T A Cそのものが実現できるわけもないし、またアメリカのその頃の経済的な事情とか建築的な熟成度というのは、日本には当然なかったわけだから、それも一方の目の一角にみながら、とにかく共同で設計というものをやっていたかなきやいけないんだ、と。

建築というのは実務の上でも共同作業だということがあつて、グロピウスが常々いつていた、ひとつの社会に対する建築家の姿勢というものは、やはり共同制作というもののいくべきだろうということを、山口先生はよく

いわれましてね。ぼく自身はそれにストレートに共鳴したというのが、偽らざる感じですよ。

…ぼくは植田一豊さん、大学の同級ですけど、とにかく仕事を実際にできる人、それから、こういうことわかる人間、ということでも…たいへんかつてに考えましてね、それで手紙を書いたわけです。それからこんどは山口文象先生自身が手紙を書かれた、……」

植田「それはぼくに対するじゃなくて、自分の夢に対するラブレター。……T A CとR I Aの組織論というのは非常に大きな関係がある…まず集団指導型であるということですね。彼自身は、ここでいつぺん若い人たちに仕事を預けてもよい、グロピウスのようにしてみたい、と。……(グロピウスから教えられて)「ソシアル・デモクラート」という複合概念があるんだよということでは、彼はいたく自分の方向に対する救済を感じた。彼は自分のコミュニケーションとしての裏切りにたえずさいなまれていましたから、非常にグロピウスの言葉はきいていると思いますね。……これがT A CとR I Aの裏側の話における彼の精神構造論を、実によくいい当てていると思います。だから彼は建前として集団指導制に踏みきつたわけですよ。……われわれ3人ともいついていつた理由と思います」

近藤「ぼくはね、神奈川大学のコンペに入選したというときですよ。……ぼくのはいつたときには、すでにR I

Aの事務所は結成されていたわけです。一応あの仲四号館で植田さんと三輪さんと岸さん、3人おられたわけですよ。三輪さんとは、猪熊先生のところで絵をかいていたというつながりがあつて……、ぼくもその当時、就職で困ったわけです。……猪熊先生に聞いたら、山口文象先生というのはいへん鋭い建築家だということだね。それが直接名前を出さないで、極端にいえは解説に植田さんが、いまと変わらないような、わりあい勝手なことをいっているわけね（笑い）。ぼくはこの文章とローコストハウスには、実をいうとかなり惹かれたですね。そんなようなことで、その秋に新作展が終わって三輪さんを訪ねることから始まる。売り込みはいへん熾烈をきわめて、やりましたね」

「ローコストハウス」を発表

東京都美術館で開催された第十六回新作派協会展（9月21日～10月7日）に、RIAグループ（山口三輪、植田）として、12坪平屋の木造実物大のモデルハウスを「ローコストハウス」と名づけて、「金24万円（坪単位2万円）也」の正礼付きで出品展示して話題となった。

このとき山口は、西欧諸国では社会政策として進めている住宅政策が日本では遅れていると指摘し解説する。

(61)

「我々のローコストハウスは、アメリカの組み立て住宅のごとく高度化された工場生産技術に依るものではない。一部の構造部材と建具は Pre Fabrication に依存することとは考えられるが、他の大部分は現場施工であつて、特別度の技術を要しない。壁は従来の小舞を掻いた真壁である。

……Walter Gropius は、建築家は豪壮な個人住宅を芸術作品として誇示している時代は過ぎた、建築家は社会を構成する衆のために奉仕しなければならない、という意味のことを Rebuilding our Community の中で書いているが、研究所のメンバーは夫々に職場を持つメンバーが恰も TAC のように同じ研究課題に集つて自由に構成している。Idee もまた彼とともにあり、我々は研究所の仕事がこの Idee で貫きとおしたいと希っているのである」

植田の解説はいかにも技術的である。(62)

「ローコストハウスの技術的な革新というのは、山口文象の出し方は非常に明快ですね。それは江戸時代のしもた屋はあのぐらいたったというんです。「2寸5分の柱にいきなり鴨居がついてだいじょうぶだよ、もつよ、江戸時代ずつともっていたんだから」って。あれは江戸庶民の生活水準を単純に再現しただけだから、全然心配ない。ぼくは全部高さは6尺6寸、いまの2メートルの柱を使って、市場でいちばん安い端柄材しか使っていない。

……そういうふうにはひき立てられて、山の工場で切った材料はそのまま全部使って1本も工作しないというのが、R I Aの初期の住宅です」

近藤正一は後に、R I Aの「げいじゅつの時代」の作品として、時代背景とともに解説している。(26)

「芸術の時代は、ローコストハウスから始まる。」33年、新制作展にこの実物が金2万円也の商札をぶら下げて登場したとき、多くの建築家たちは「あまりに極端なローコストは、住宅の質をますます低下させるものだ」と反対を表明した。この批評は社会に向つては当を得ているけれども、R I Aに対しては当てはまらなかったと思えない。当時の世相から、どうしても社会主義的な色彩のもとで芸術作品をプレゼンテーションしなければならなかったのは、R I Aの主宰者山口文象の場合だけとは限らない。ちょうど、同齡の前川国男も、コストの差こそあれ、プレモス住宅という量産化の庶民住宅を発表したのもその当時である。したがってこのローコストハウスの流れをくむ、大久保邸、小町邸のような、決してローコストでない住宅で、同じ手法による、すぐれた芸術作品を発表することも可能であつたわけだ。……この当時の住宅は、いずれもアメリカのモダンプランの影響を受け、その表現は真壁構造、構造材露出の手法を徹底している。まさに一作一作が写真になる芸術であつた。

この頃は、建築界全体が貧乏の時代であつたので、建

築家の日は専ら、小住宅にそがれていた。清家清、池辺陽を初め、若い世代の増沢洵、安田与佐、永松亘、白倉健之……広瀬鎌二……この時代の作家たちは、まったく同じ環境で、まったく同じ考えのもとで出発し始めたのである。こういった意味で、R I Aも当時のういういしい住宅作家の第一線に並んでスタートを切つた」

ローコストハウスは、現実に「高橋邸」として建設されて、一時は三輪正弘が住んだことがある。

この年、「婦人朝日」の住宅欄に山口の名で1年間執筆して単行本となつたが、原稿はすべて植田が書いた。

備養会をはじめ

この頃から、高木金次（明治生命社長）と三枝博音（社会学者）を中心にして、「備養会」（びあんかい）と名づけた陶磁器を楽しむ会を財界人たちと始め、山口も夫妻で参加していた。当時、三枝主宰の東西文化研究所が仲四号館のR I Aに同居していた。(27)

★写真…大久保邸（建築学大系38124号）、関東学院グレースセット記念講堂（237P）、備養会の仲間達と、初期R I Aメンバーとともに1右から山口喜美子、富永六朗、山口文象、植田一豊、近藤正一、三輪正弘、植田禎子（177P）

★図…ローコストハウス平面図（建築学大系38）、●作品…ローコストハウス（高橋邸 東京・目黒、「新

建築」52・10月号)、大久保邸(東京・目黒、「新建築」53・6月号、「国際建築」53・7月号、「世界建築全集」14)、土田邸(東京・久ヶ原、「新建築」83・7月号)、川上邸(埼玉・入間市)、関東学院グレースット記念講堂(神奈川・横浜市、「新建築」52・10月号、「建築文化」52・11月号)

●著述…「住宅」(山口文象 朝日新聞社刊)、「懸賞設計競技」―「現代の住宅」―「社会史に於ける位置」(「新建築」52・7月号)、「我々の問題としてのローコスト住宅―直面せる住宅事情」(「新建築」52・10月号)、「懸賞設計競技」―「現代の住宅」―「気の附いたこと」(「新建築」52・11月号)、「住宅相談室」(1年間「婦人朝日」連載)、

1953年 昭和28 51歳

RIA建築総合研究所を設立

1953年1月10日、設計組織としてのRIA建築総合研究所(The Research Institute of Architecture)を発足させて、山口は戦後の再出発を果たした。

場所は解散した山口蚊象事務所のあった東京丸の内の三菱仲四号館であり、所員は山口文象、三輪正弘、植田一豊、山口栄一であった。その出発を、植田一豊はRIA最初の経歴書に書く。(52)

「個人経営を排して共同設計チームをつくらうという山口文象に共鳴した三輪正弘と植田一豊の参加を得て、RIAがスタートしたのは1953年、米軍による接収を解除された旧山口事務所の一室でありました。翌年、近藤正一が加わって初期の核づくりが固められたのです。

僅かな仕事しか得られなかったので毎日エネルギーをもてあまし、それ相応に芸術家づいていた彼等は、造形理論についてまたRIAの将来像について議論をたたかわせておりました。

横須賀線の鶴見事故で亡くなられた三枝博音博士が、そのころ《東西文化交流研究所》をはじめられ、部屋がないためにRIAに同居し研究活動をされていました。三枝さんの下には数人の若い研究者があつて、わたしたちと日常をともしていましたので、お互いに教えられることが多かったものです。毎週共同研究会をもち、報告書を順にきめて芸術、文学、技術、歴史等をかなりひろく関連させながら、3年あまりこのミーティングを続けたのです。その時期は苦しい経営状態とはうらはらに、いちばん贅沢な時代だったといえるかもしれません」

三菱仲四号館は、現存すれば重要文化財指定確実な赤レンガ造2階建て事務所建築だった。その中で編者も一時働いたことがあるが、各部屋にホールアクセス型プランで、壁はレンガ造でも床と屋根は木造だったので、階段はきしみ足音は大きく響いた。

同じ建物の2階に、三輪正弘の父の政治家・三輪寿荘の事務所があり、後にこれもRIAが借りて事務所とした。1970年代の三菱赤レンガ街の建て替えて大手町ビルに、更に2001年には港区港南に移転した。

★顔写真…三枝博音

グロピウス招聘の準備に参加

国際文化会館が、ロックフェラー財団の特別寄付金を得てワルター・グロピウス夫妻を招くことになり、建築学会に協力要請があり、山口らが歓迎小委員会を設けて検討をはじめた。

●著述…「住宅志言」(「新建築」53・11月号)、「大田区政会館計画案」(「建築文化」53・12月号)、「住宅」(朝日新聞社刊)

1954年 昭和29 52歳

グロピウスと32年ぶりに再会

ワルター及びイセ・グロピウス夫妻が、国際文化会館の招聘で日本に来たのは5月19日であり、山口は32年ぶりに師と再会した。8月7日までの滞日中に精力的に日本各地をまわり、6月3日に日本相互銀行、厚生年金病院そして日本医科歯科大学(山口出世作の日本歯科医専)を訪ねたが、山口は遅れて駆けつけて案内した。

6月の暑い日、グロピウスが丸の内仲四号館のRIAを山口の案内で前触れもなく訪れた。下着シャツ姿で製図していたその年の新入所員の近藤正一は、山口からグロピウスに紹介されて、とまどいながら握手をした。

7月23日には箱根仙石原にて、グロピウスの講演と当時の代表的な日本の建築家5名との討論会があり、山口も出席した。

この年から長期継続する神奈川大学キャンパス(横浜)の仕事が始まる。★写真…来日したグロピウス(松本洋市所蔵)

●作品…小町邸(世田谷、L'ARCHITECTURE

DAIJOURDHU)56・5月号、「新建築」55・2月号)、神奈川大学計画・校舎・研究室(横浜、「国際建築」54・3月号)、化粧ビル(台東、「新建築」55・10月号)、宮下邸(小金井)、石下保育園(茨城「新建築」54・8月号)、平井邸(練馬)、辻村真弓邸(中野、「建築文化」55・9月号)、国分寺の集団住宅(東京・府中、「新建築」55・3月号、「建築文化」55・9月号)、大日本製糖(堺工場)「新建築」54・12月号)

●著述…座談会「庶民住宅をどうするか」(「新建築」

55・4月号)、「高床式住宅を三つみて」(「新建築」54・5月号)、「海外建築紹介グロピウス」(「建築界」54・6月号)、座談会「国立国会図書館入選作をめぐって」

て」〔近代建築〕54・8月号）鼎談「大日本製糖（株）工場」〔新建築〕54・12月号）、

1955年 昭和30 53歳

建築家の思想について発言が多くなる

9月、東京の国鉄労働会館ホールで開催された「〔零〕の会」主催の第一回建築公開討論会「建築家とは」で、前川国男、金子勇次郎の講演に対して質問（「建築文化」1955年11月号）。

5月に日本建築家協会会員となり、この頃から建築家の思想、社会的立場に言及するようになる。（23）

「日本の近代建築家はこうして十年のブランクをどうにか凌ぎ得て敗戦を迎えました。われわれはフアシズムの永い間の弾圧から解放され、人間の権利をもう一度に手にすることができました。天皇は人間宣言を發し、マッカーサーによつて治安維持法が撤廃されて共産党の指導者達はG・H・Qの前でマッカーサーと共産党の万歳を三唱するとうように急角度に状況が發展して来ました。十年の虚脱はまだ意識的な立ちあがりにまでは程遠いことでしたが、地底からはかすかながら建設への足ぶみを感じられるようになりました。ここで近代建築家達はそつとあたりを見廻わして見ました。世の中はすでに、自由主義、社会主義、共産主義をいかに大声に叫ぼうと

も唯一人咎めるものがない民主主義の時代です。ヤマトイズムの頬被りをそつと脱いで、もとのステージへ再登場してきました。そしてこの戦争協力者達は建築における近代精神の先達としての場につきました。

……思想の貧困は建築家をアルチザンに格下げするでしょうし、日本の近代建築に先き細りの栄養失調を結果させるでしょう。日本の建築が永い間の植民地性から脱皮し、本来のほんとうの自分達のものを作りだすためには、厳密な自己批判と相互理解の上に立つた忌憚のない討論がきびしく行われなければならないでしょう。ことに私は私達が重ねた過ちを、これからの若い世代の人達に繰り返えしてもらいたくないために一層強く望みたいのです」

この年、石村勇二、富永六郎が所員となる。

★写真…室生寺にて（239P） 自宅のクリスマスパーティーで（239P）、大日本精糖工場（239P R I A）、

●作品…神奈川県住宅公社上平間・西寺尾・古市場共同住宅（横浜、「新建築」55・9月号）、公団登戸学寮（川崎、「近代建築」59・2月号）、三宅艶子邸（千代田、下中弥三郎邸（藤澤、「新建築」55・2月号）、沖中重雄邸（軽井沢）、耳聾の碑（藤沢、「新建築」59・4月号）、レストラン・クラウン（名古屋）、近鉄建売住宅（奈良、「建築文化」57・5月号、「新建築」57・

2月号)、RH1(東京・世田谷「建築文化」57・5月号)

●著述…書評「池辺陽著『住い』」(「新建築」55・1月号)、鼎談「戦前から戦後へ」(山口・三輪・植田「建築文化」55・9月号)、「昨日。今日。そして明日へ」(「新建築」55・10月号)

★写真

1956年 昭和31 54歳

この頃より、ぜんそくで苦しむことが多くなる

奈良市あやめ地遊園地で開催の「楽しい生活と住宅博」(大阪朝日新聞社主催)で、鉄筋コンクリート住宅コンペ審査員(3月)した。

川添登・浅田孝らの企画による建築懇話会第三回の会合において、「和風論」を講演(8月25日)した。

この年、池上彰一、坂根良朗が所員となる。長兄・山口順三が他界した(3月)

●作品…東京板金工場(川崎、「新建築」57・9月号)、館石旅館(富浦)、荏原実業ビル(東京、第1森ビル(港)、神奈川大学図書館(横浜)、木島邸(練馬)、岸田麗子邸(新宿)、

1957年 昭和32 55歳

通称の「文象」(ぶんぞう)を戸籍名とする(5月9日)

●作品…神奈川大学特別教室(神奈川・横浜市)、東京部品蒲田工場(東京・蒲田、「新建築」58・2月号)、昭和鉱石綿工場(高崎)、川合信雄邸(世田谷)、日本航空社宅(東京)、旅館山水荘(茨城)、緑成会整体園本館・病院(小平)、大串邸(東京世田谷、「建築文化」58・4月号)

●著述:「家具はだれのものだ」(「建築文化」57・3月号)

★写真…神奈川大学(RIA所蔵)

1958年 昭和33 56歳

集団設計方法と組織原理を模索

RIAの設計方法について後に山口は言っている。

(2)

「設計のプロセスとしてはいろんなことをやってきたんですよ。本当のこといえばまだ固まっていけないんです。まだみんなの意見が一致してやったというのはあまりないんですよ。ただ、植田君とぼくとの感覚が非常に合っているものだからね、ツーといえばカーなんです。カーといえはツーなんで、これはどっちがデザインしたかわからないが、ところが三輪君の発想・デザインには抵抗

を感ずることがありますね。それから近藤君のやつているデザインにもちよつと抵抗を感ずるんです。それでやはり4人で相談して、こうしようとか、ああしようとかこのプランは全然こまるじゃないかということをやっているんです」

植田は、当時の雑誌にR I Aリポートとして書いている。(62)

「R I A初期の数年間はとくに住宅デザインに精力が集中され、住居のプランニングに対する方法論が追求されました。たとえばひとりの施主から住宅設計の依頼があったとします。窓口担当者が計画条件を整理した上で他のメンバーに配布します。ディスカッションの日時をあらかじめ約束しておき、各自は平面のスケッチをもちよるのです。この小さな競技は、参加者がお互いの案を批判し意見を出し合うという方法で進められます。ここで選ばれた案がその提案者と事務担当者の手で具体的にまとめられ、こんどは施主との間のディスカッションが繰り返えられる、といったやり方です。われわれはこれをプランニングコンペと呼んでいました。

このコンペ方式はいつも最上の答を出してくれるとは限りませんが、その代りによい案が出ないときは設計に移すことができません。駄作は手ひどくやつつけられて姿を消してしまいます。しかしわたしたちがこのようなコンペディスカッションを重視した理由は、ま

えにものべたように仕事の能率化ということではなく、むしろチームのメンバーがお互いの能力を確認し競争することによって、共同競計チームの総合力を開発し高めることにあったといえましょう。

ですから外部に対して、はなばなしい個人の才能がPRされませんでした。R I A内部ではお互いの激しい作家根性なり個性がむき出しにされていたのです。所長山口文象はつねに「建築家でござい、といばらないこと」「マズくともよいから絶体にマネをしないこと」と口ぐせのように話していました」

三輪正弘は、集団設計方法の内部効果を説いている。

(63)

「このコンペ方式は、デザイナーの発言がプランを武器にして行われるべきだという、すじを通す意味で重大である。外部には個人のタレントはなかなか見えてこないが、チーム内ではいつまでも埋没しているということはない。作家的カタルシスはある程度発散され、仕事のサーキュレーションのメドも一応つけられるということになる。この方式の繰返しには必ずしもフレッシュな展開があるわけではない。低調によんどで一発が出ないときも多い。それはチームの創造力の貧困として自覚されなければならぬだろう。

コンペディスカッションはチームに於けるトレーニングの方式として理解され、そのように使われて行くとす

れば、設計論の交換はやがてある振幅をもった共通のテーマにしばられて行くことにもなるし、一方ではルーキーのデザインメソッドを短期間で引き上げるといふ効果も見逃せないことになるわけだ」

近藤正一は、R I Aの「げいじゅつの時代」につづく「まもりの時代」として住宅の設計方法を取りあげて言う。(67)

「R I Aの世帯が4、5人の小人数の時代は、住宅の場合、交渉・プランニング・ドラフト・監理が個人担当で行なわれることも多かったが、世帯が大きくなるにつれて、当然チームとしての方向性が必要になった。メンバーそれぞれが案を持ち寄る、コンペ形式のディスカッションが考え出されたのはこの頃であった。

このコンペ形式は現在までつづいているのだが、その中でチームの指導原理をもっとも打ち出したのがゾーンニングによるプランである。生活のしくみをゾーンに分けながらプランする方法は、そのすまいの性格を、チームのメンバーにもっとも明かにすることができる。しかも、当時流行の動線による解析とちがって、その組み合わせは相当変化にとんでいるので、一見大まかに見えるこの方法が、意外に細かなニュアンスまでもり込むことができる。計画原論的なものと細かなニュアンスを別々の角度から評価すれば、その優劣は、おのづからはつきり表われ、当選案を決めるために、うるさ型のメンバーを説得

するには最も適した方法にもなる。

それ以前のクリッドによる長方形のかたいプランからかなり凸凹のある自由なプランに移行できたのは、このゾーンのおかげであるが、ますますR I Aの住宅が平均点以上というあまり個性表現のない方向に向うことになった。つまり芸術的な住宅から遠のくのである。エレベーションを気にしない、芸術でない住宅の時代、この時代がR I Aの住宅のもっとも油ののった時代であろう。そうしてこれからも住宅をつづけてやろうという意地が生れてきた時代であったようだ」

そして後年、3人で語りあう。(68)

三輪「われわれは動かしたのか動かされたのかわかりませんけれども、そのへんは一種のあうんの呼吸で、三人ぐらいしかいなければほとんど同じ構造になっちゃうんです。…われわれは自分の作品にしたいなんて思っていないんですから」

近藤「そうですね」

植田「恥ずかしいけれど、もしよかったら山口先生の作品にしてください、というだけの話で、われわれが担当したからどうこうなんてケチなことは全然いってないんですから、ただ名誉のためにいうと、われわれが少しやりすぎたので、ちょっとケチをつけたかな」

三輪「まさに予定調和だったということが、真実のほとんどじゃないかな」

近藤「それと、ある領域は徹底してまかせるということがある。文章を書くとか座談会に出るとかいうことについてはまったくフリーでやらせていたわけ。在来の作家的な気持ちからすれば、そういうところにならずイチャモンをつけなければいけないところだと思っただけでも。われわれはそういう部分でわりあいカタルシスが行なわれていた。だから、R I Aの作品即山口文象みたくなかたちは、わりあいと抵抗なくやれた…」

三輪「原稿の代筆もよくやりましたね、グロピウスのあれ……」

植田「そのへんはほとんどあうんの呼吸で満足している……」

近藤「逆に先生のほうは、自分は気にくわない、というのがあるんですね。こんなのは山口文象といわれたくない、という。たとえば新制作で、ぼくが主になってやつたやつが出るわけですよ。そこに「山口文象」と書いてある。そのあと先生がこっそりきて、「山口文象＋R I A」と直してある（笑）。それは彼の自己弁解であると同時に、ある意味ではぼくに對する手練手管をこめた抵抗でもあるわけですよ」

●作品…神奈川大学本館（神奈川・横浜市、「建築文化」60・2月号）、坂本紙店（福島・平）、野口邸

（渋谷・代々木、「新建築」63・6月号）、東京インターナショナル整流器工場（神奈川・秦野）、

●著述…アンケート「建築教育に對する70氏の意見」（「建築雑誌」3月号）

1959年 昭和34 57歳

株式会社建築綜合研究所を設立

これまで任意組織だったR I A建築綜合研究所を、4月に株式会社として法人登記し、山口は代表取締役社長に就任した。このとき所員数は16名。社名には登記法でローマ字のR I Aをつけることができなかったが、建築綜合研究所の名は類例が多くてときに勘違いを起すことがあったりしたので、もっぱらR I Aのニックネームで「リア」とか「アールアイエー」と呼び、後に社名を変更する。

●作品…朝鮮大学校（小平、「建築年鑑」83、「新建築」

83・6月号、「国際建築」62・5月号）、大森教会（大田区、「建築」1・5月号）、大阪谷町既製服協同組合会館（大阪）、日本ファイバーアングル工場（山形・新庄、「近代建築」61・10月号）、原町公民館（いわき）、船橋中学校（世田谷）、桜ヶ丘中学校（世田谷、加村邸（国分寺、「建築文化」60・4月号）、大野邸（品川）、北村邸（東京・四谷、「建築文化」60・4月号）、立売堀地区再開発計画（大阪）

1960年 昭和35 58歳

月号)

肺気腫で入院

肺気腫を患って東大附属病院の沖中内科に入院した。かなり重かったが奇跡的に回復した。このあとにも呼吸器系の病気で2回入院する。

1962年 昭和37 60歳

●作品…美術家会館（中央）、全国金属労働会館（東京）、

高根カントリークラブハウス（熊谷）、荏原製作所妙高ヒュッテ（新潟、「建築」62・3月号）、井上孝雄邸（世田谷）

★写真…入院中（240P）

1961年 昭和38 59歳

RIA所員数16名、住宅設計通算200件となる(5)

この年のRIA所員は、山口文象、植田一豊、三輪正弘、近藤正一、山口栄一、石村勇一、坂根良朗、富永六郎、稲地一晃、北島道生、水口禎、福井稔、大部貴代子、上平三和子、北住金吾、伊達美徳の15名で、個人住宅の設計が1953年以来通算200件となった。

この年の末に交通事故にあつて骨折し、東大の外科にかかった。

★写真「びあん会」の仲間たちと（240P）

●作品…石打観光ホテル（新潟・石打、「建築」83・3

●著述…「せんべい焼」（「木工界」61・1月号）、「創宇社建築会のこと」（「建築と社会」61・12月号…これ竹村新太郎が書いたようだ）

この頃から組織と個人のあり方で模索

建築家大谷幸夫と対談して、RIAと自分の次のあり方について模索を始めたらしきことを語る。(6)

「この10年というものの積み重ねは私自身忍耐ですよ。私のオリジナリティーを殺さなければいけないところもあったし、独走しちゃいけないし、そのところをうまくやって、どんな勝手なことをいわれても怒らないようにしなければいけないし、この10年間の忍耐は私はほめられていいと思うんです(笑)。この10年間の積み上げがそろそろ効果を現わしていんじゃないかと期待しているんです。…私はできるだけ若い人の中からすばらしいタレントが出てもらいたいと思うんです。これ以外ないですよ。そしてRIAというものが存続して、みんなが育ちちゃって心配がなくなれば、私はRIAの中に個室をこしらえて、やりたいことをやろうという助平根性はあるんですよ」

この年4月から女子美術短期大学非常勤講師となり、

服飾科で住居学を講義し、1969年3月まで続けた。

★写真…RIA10年記念パーティー 山口邸にて（伊達所有）

●作品…三浦高等学校（横須賀）、久ヶ原教会改築（久ヶ原）、高根カントリークラブ（埼玉、「建築」63・3月号）、美術家連盟会館（東京・銀座、「建築」63・5月号）

●著述…対談（1月27日）「近代建築の黎明」 神代雄一郎著 美術出版社刊、対談「戦前・戦中・戦後」（新建築6月号）、対談「都市計画にヒューマンスケールを」（週刊「建設ニュース」第40号6月第2週号）、対談「建築家の姿勢」（週刊「建設ニュース」第41号。6月第3週）、「ハイマートローゼ」（「室内」7月号）

●受賞…建築年鑑賞（朝鮮大学の設計 3月）

1963年 昭和38 61歳

病氣入院して長期療養

1月はじめ容態が悪くなりだし、21日に東大病院沖中内科に入院、翌日より危篤状態となった。2月になつて持ちなおし病状は一進一退していたが、ようやく癒えて8月20日に退院し、9月4日事務所に出勤した。

三枝博音の遭難死にショックを受ける

同じオフィスにおいて長く親交を続けてきた哲学者の三

枝博音が、11月9日横須賀線に乗っていて鶴見駅付近の事故故で遭難死し、山口は大きなショックを受けた。

この年、日本住宅公団を辞した藤田邦昭が入社（70）

●著述…トップレベルの貴重な存在（「佐藤武夫作品集」 相模書房63・12月）

★写真…事務所の所員とともに（238p）

1964年 昭和39 62才

日本建築家協会理事に就任（任期2年間）

芸術振興国会議員懇談会の第1回会合に出席（3月26日）

●作品…新制作座文化センター（八王子、「建築」64・3月号、「建築文化」64・3月号、「近代建築」64・3月号、「新建築」64・3月号）

●著述…「日本不燃建築研究所特集に寄せて—素晴らしき建築家」（「建設グラフ」1月号）、「芝居小屋」（「建築」3月号）、「前衛建築家の宙返り」（「新建築」6月号）

1965年 昭和40 63歳

東京工業大学の講師となる

この年4月から1970年3月まで、東京工業大学工学部建築学科の非常勤講師として、建築デザインを教えた。ワークショップ方式で幅広い造形教育に熱をいれて、学生に評判のよい教師であった。

★写真…東京工業大学で学生とともに 1976 (182 p)

1966年 昭和41 64歳

キリスト教の洗礼を受ける

久が原協会で4月10日に洗礼を受けたが、唯物論者のはずの山口がキリスト教信者だったとは、親しかった創宇社時代からの仲間たちも、その死まで知らなかったという。

★写真…久が原教会で洗礼を受ける (243p)

この頃から、組織と作家の関係について山口は悩み、このように書いている。(GA)

「R I Aとして社会的な問題に進んでいきながらも、個人としてのなにかをつくりだしたいという葛藤は、心のなかにいつもあります。……R I Aは組織による設計の方へ進むことになるでしょう。そうなることこそR I Aの本来の意義だと思います。しかし、私自身は否定しながら、私のなから大久保邸が現れたように、これらの私というものはR I Aとちがったところへとびだす

か、あるいはなかにとけこむか、私自身の心の中にのこる葛藤はいつまでも続きそうですが、私は皆といっしょに行くつもりです」

●作品…伊豆富士見ランド (静岡・韮山町、「近代建築」89・10月号)、日本金属工業相模原製造所 (相模原市)

●著述…「プランニングにおける思想性」(「新建築」5月号)

1967年 昭和42 65歳

●作品…神奈川大学記念講堂 (神奈川・横浜市)

●放送…「下町かたぎと建築家」(日本短波放送「建築夜話」)

●受勲…朝鮮大学校設計により朝鮮民主主義人民共和国より受勲

1968年 昭和43 66歳

黄綬褒章を授章

●作品…新大阪センシティ (大阪、「新建築」89・11月号)

●著述…座談会「思想と現実の狭間における建築家の意識」(「都市住宅」12月号)

●講演…「建築家の雑言」（6月）「東京・住宅公団講堂」、「現代建築家の姿勢」（9月）「大阪中の島公会堂」

1969年 昭和44 67歳

新建築技術者集団設立に参加

50年代のN・A・U停滯以来、各地で多くの建築運動団体の離合集散があったが、新たな全国的集合のはじまりとなる「新建築技術者集団」が5月に発足し、山口も参加して幹事となった。

●著述…座談会「分離派・東京中央電信局・山田守」
「建築記録／東京中央電信局」日本電信電話公社建築局）、「Walter Gropius」（「建築家」秋季号 日本建築家協会）、「山下さん」（「工匠談」 山下元靖 相模書房）

1970年 昭和45 68歳

新建築家技術者集団設立に参加

先年結成の新建築技術者集団は全国組織づくりに向けて精力的に動き、この年12月に「新建築家技術者集団」を結成した。結成1年で会員数は約千名の大組織となった。山口も初めから参加し、表面に立つことはしなかったが積極的に運動を支えた。

●作品…寺内邸（横浜市）、永見邸（世田谷区）

1971年 昭和46 69歳

建築家の戦争責任を問う

このころから各種のシンポジウムや講演会において、建築家の社会的責任を強烈に追求する発言で、七〇年安保世代のアイドリックな存在となる。日本建築家協会の講演会で建築家に向って言う。（37）

「朝鮮戦争が始まりましたあの時、兵器工場の労働者がどういう態度をとったかということですね。そのために今われわれは、こうやっていわゆる経済アニマルで、洗濯機を買ったり、ドライヤーを買ったりして一見贅沢に暮しておりますけれども—それだけじゃありませんけれども—つまり朝鮮戦争の時に人殺しの材料をアメリカから注文される、あるいはどこから注文されてやっていたわけです。自分たちの造っているものはなんであるかみな知っていたわけでございます。一人一人がそれを知っているが黙ってみてきた。全部目をつぶってきたわけです。今になってベトナムがどうだとか、アメリカの軍国主義がどうだとかいうことをいつているわけです。こういうふうに、たとえば個人個人の労働者自体が、今自分はどういうものを造っているかということとはわかっていることなのです。それをどういうふうに行動の中でエ

キスプレツションするかということをしなないで、させないで20年間それに流されている。これは労働組合ばかりでないが、これが象徴的な日本のありかたであるようです。日本の建築家が背負わされている最もきびしい住宅問題について一言の発言もないのはどうしたことでしょう。この矛盾にみちみちた社会事象について、建築家ももう少しものを考えてきたらなにかそれが行動に現われて来る筈だと思うのですけれども」

また別の機会では、戦場に学徒出陣させた当時の東大総長だった建築家を糾弾して、声高く戦争責任を問う。

⑤

「ドイツ、フランスにおいても、少しでもナチに関連した者はすべて挙げられています。ハイデッガーほどの哲学者さえもそうなのです。建築家の中でも、戦前から戦後にかけての作品をご覧になったことがありますか。タ伊の日本文化会館など、ほかにいくつもあるでしょう。作品とその説明書をごらんになりましたか。その建築家たちは、いつの間にやら今、日本の近代建築のリーダーとなつてゐるのです。それほど日本人は自己撞着の天才であります。これが人間を考え社会を考え、人間としての建築家でありましょうか。もういつぱん考えてもらいたい。いまぼんやりしていると。世界はどうなつてゐるか……」

●座談会「建築と演劇」(現代日本建築家全集二「坂倉

準三、山口文象とRIA」三二書房

●作品…是の字寺(愛知・岡崎市)

1972年 昭和47 70歳

建築家のデザイン思想を問う

日本建築家協会で、「建築はどうなる」と題して大谷幸夫と対談する。(31)

「建築家というのは、あらゆる制約の中でやる仕事でございますね。ですから、社会体制の中で今日のような非常にむづかしい社会情勢の中で、絶えず大小の波調にゆれ動されているわけですが人間として、建築家としてこゝうあるべきだという姿勢だけは崩すべきじゃないと思うのです。流される建築家ではなく、考える建築家でありたいと思います。

呉服屋の旦那とお出入りの棟梁、いわゆる出入りの大工、それに今の建築家はなりつつあるのではないか。そこに、哲学と自立性ある思考が建築家に望まれるゆえンであるわけです。近頃の建築について装飾というものを考えさせられますが、装飾性というのは、いわゆる壁とか柱にモルディングをつけるというようなそういう装飾でなくて、プランニングの上でも構造的にも装飾的だと私は思うのです。言葉はちがうけれども、遊びでございますね。構造の遊び、プランの遊び、そういうぜいた

くをいい気になってやっている。建築家のマスターシ
ョンのはらんです。それが日本ばかりでなくて世界全
体の傾向だと私は思うのです。この傾向をもう少しシャ
ープな目で見て、そしてこれに抵抗する姿勢というもの
を持つて、対処していかねばいけないと思うのです。
とにかく建築家というものは特異な形の、特異な色のつ
まり歌舞伎でいえば花道にかかった時の仕手みたいなも
ので、華やかにスタンドプレーをするということが、ほ
んとうの新しい近代建築家であるというふうに誤解され
てはかなわないと思うのです」

★写真…右は建築家吉田五十八氏 1972年、武蔵
野市開発公社ビル竣工パーティーにて 1972年3月
●著述…講演「建築はどうなる―体制に流れる建築家で
はなく自律的に考える建築家でありたい」（「建築家」19
年夏季号）

●作品…三国邸（杉並区）、千葉邸（世田谷区）

1973年 昭和48 71歳

●座談…「マヴォ」と「創宇社」の時代」（「新建」第5
号73）、「生活空間の創造」ワルター・グロビウスにつ
いて―山口文象先生にきく―（「建築雑誌」73・11
月号）

●作品…町田郷土資料館（町田市 現・町田市立博物館

この後、山口は評議員をつとめる

1974年 昭和49 72歳

1975年 昭和50 73歳

株式会社建築総合研究所取締役会長となる（4月）

●講演…「近代建築の流れを追って」（「新建築家技術者集
団福岡支部主催講演会 7月26日）

1976年 昭和51 74歳

旧作を訪ねる

この前年あたりから、山口の作品集を発刊する企画が
RIAで進行中であり、12月11日はその一環として、
山口は佐々木宏、長谷川堯、河東義之、編者らとともに、
朝日新聞社（今は無い）、清洲橋、浜離宮南門橋、酒井
憶尋邸、浄智寺茶席（建築家榛澤敏郎の案内）を見てま
わった。久しぶりに旧作を訪ねて、現場で懐かしく解説
もして、夕方から北鎌倉の料亭で昔をおおいに語った。
そのときの録音テープ（編者所蔵）の内容もこの年譜に
入れた。

★写真…浄智寺茶席の山口文象1976（伊達所蔵）

●著述…対談「職工徒弟学校のころ」(「室内」8月号)、対談「兄事のこと」(「建築をめぐる回想と思索」新建築社刊1月)、対談「ガラスと建築」(「INREPORT」8月号)伊奈製陶1976年5月)、対談「新制作の四十年」(「新制作の四十年」新制作協会9月)、対談「建築を創る」(日本建築家協会、佐々木宏10月)

1977年 昭和52 75歳

株式会社建築総合研究所取締役相談役となる(4月)

●著述…対談「近代建築の目撃者」(「近代建葬の目撃者」新建築社刊4月)、対談「戦前の集合住宅に取り組む」(「新建築」6月臨時増刊号)、「北鎌倉の茶室」(「住宅建築」8月号)、「石本書久治氏との出会いのころ」(「日刊建設通信」9月16日号)

1978年 昭和53 76歳

昭和建築研究会主催シンポジウムで発言

1月14日、シンポジウム会場に一般聴衆として参加し、司会者から指名で、近代建築の成立から建築家の姿勢を問う長い演説をした。公の場での最後の発言となった。(8)

「ご覧のとおりのお老人でございまして、建築活動は大正

末期から今日まで、割合に職人的な仕事をしてまいりました。……職人的に建築の設計と、建築家としての仕事を、がむしやらにやってみりましたけれども、そのがむしやらにやっているなかで、人間を考え、社会を考え、世界を考えてまいりました。そこから離れそうな難しい時代でございましたけれども、とにかく私は自分なりの考え方から足を離さないで、どんなに貧乏してもかじりついていきたいというふうに考えてまいりましたのですが、いかがでしょうか、こういう問題は……建築家も思想家でなければならぬし、建築家は人間を考えなければならぬ。そういうなかで、建築家自体がどういうふうなやり方をやってきたか。明治、大正、戦争前それから戦争中、戦後、これがどういうふうに変ってきたか、それをもういっぺんお考えねがったらどうかと思います。……」

創宇社同人たちが久が原で会合

3月18日(土)、梅田穰、海老原一郎、竹村新太郎、平松義彦、山口文象の創宇社建築会同人による会が、久が原の山口邸で催された。佐々木宏、長谷川夷、河東義之も聞き役として参加し、おおいに語り合った。

突然に76年の生涯を閉じる

5月19日の午後、久が原の自宅近隣の知人宅にて歓談中に、突然に心筋梗塞で倒れ、そのまま不帰の人となった。享年76歳であった。

5月21日に久ヶ原教会にて告別式、6月1日に東京渋谷の青山葬儀所にて、日本建築家協会・新制作協会・RIA建築総合研究所の合同葬儀。喪主は山口喜美子、葬儀委員長は近藤正一、弔辞は松田重平・池辺陽・千田是也・竹村新太郎・海老原一郎・篠原一雄・植田一豊・山家啓助、祭壇デザインは三輪正弘。

その死を2人の弟子は語る。(50)

植田「建築全体に対する疲労感というのが病気になられるところからあって、……。建築全体の主体性に対する疲労感というのは日本にもありましたし、RIAにもあったと思いますね。……とくに、彼はまだ死ぬつもりじゃなかったから、ちょうどこれでだいたい問題は整理したし、これから一発やれるな、70歳だし、あと十年はやるな、これから自分の思想は語れるなと思っていたと思いますね」

三輪「モラトリアムじゃないけれども、その時期を延ばしていたと思うんです。それが命と交差した」

山口は絶筆を、建築家たちに訴えてこう結んだ。(51)

「建築家とはなんでしょうか。世直しをする革命家でもなければ、権力的な政治家でもなければまた、施政の官僚でもない。私は建築家とは人間が幸せに生活することの出来る空間を創造する人間であると常に考えています。画家はキャンバスの上に絶対的な二次元の空間を創造するでしょうし、音楽家は無の空間の中に音の創造的な分割

をこころみるでしょう。また、演劇も文学もすべての芸術は、すべて精神の昇華への創造的な行為でありましよう。

しかし、建築家は人間全体を考え、すべての生活活動を包含する空間を創ることにあります。基本的な固体が複数となればファミリーであり、これの集合が社会となり、国が構成され、グローバルに広がって世界的な大きな生活空間になるわけですが、この形成とプロセスを建築家としての正しい視点から見つめ判断して、人間集団の営みに参加することが大切です。建築家は単に家を創ることだけでなく、よい社会を創り上げる基盤になることでしよう。技術者であると同時に思想家であり、人間の生活を総体的に把握出来る芸術家であることが望ましいのです。……

この会の諸兄は、地域的に研究会を持つておられるようです。この研究会を思弁的な、また饒舌の空回りにおわる集まりにはしたくありません。その地域の農漁村の民家、村落のなりたち、小さな城下町の都市的な考察など、調査や研究の対象にはこと欠かないでしょう。これらが、とりまなおさず地方文化の根であり、ここから歴史的な民族の姿が浮かびあがって来るはずですし、建築家の取り組みなければならぬ素材でもあります。毎日の具体的な仕事の他に余力はないかもしれませんが、堪えて地方文化のためにまた、諸兄の正しい建築家への志

向のためにも、やらなければならない「仕事」であるに違ひありません。各青年部会の地味な研究が実つて、充実した力が結集された時、われわれの建築士会は、わが国の建築家全体を指導し得る団体になるに違ひありません」

●著述・「地域に根をおろした建築を」(「建築士」4月号 絶筆)

●参考及び引用資料リスト

- (一) 清水建設兼喜会50年「清水建設
- (二) 兄事のこと」(対談集 建築をめぐる回想と思索)新建築社1976
- (三) 浅草文化の中で(「建築家山口文象人と作品」相模書房1982)
- (四) 創宇社建築会同人たちのこと・山口文象(「竹村文庫たより」9号 1995)
- (五) 職工徒弟学校のこと(室内)1975年8月号)
- (六) 東京工業大学六十年史、東京高等工業学校一覽等。
- (七) 建築夜話―下町かたぎと建築家(1967年7月 日本短波放送・再録 1978年6月19〜30日 故山口文象追悼対談再録)
- (八) 講演 創宇社のこと(NAU近代建築運動史講座1949年10月21日講演速記(未公刊))
- (九) 対談 建築をつくる(山口文象 聞き手:佐々木宏 日本建築家協会 1976年10月13日)文書の記録はないが、編者が録音テープ

を所蔵。

(一〇) 歴史の会の記録「1972年2月17日(「竹村文庫たより」6号、7号)―これは元創宇社建築会のメンバーが集つて、その当時のことを語つた会であり、竹村文庫に録音テープが保存されている。

(一一) 北鎌倉でのインタビュー(1976年12月11日録音テープより)―これは北鎌倉の料亭で山口文象を囲んで話を聞いた会で、編者が録音テープを所蔵している。この日の出席者は、佐々木宏、長谷川典河東義之、植田実、田中俊彦、山口次郎、狩野哲夫、伊達美徳。その日は朝から、朝日新聞社、清洲橋、浜離宮南門橋、酒井邸、浄智寺茶席を見てまわつた。

(一二) 竹村新太郎氏のお話を伺う会記録(RIA 1976年5月25日)

(一三) 座談会:分離派・東京中央電信局・山田守(「建築記録 東京中央郵便局1969年」)

(一四) 岡村蚊象と創宇社の時代(「建築家山口文象人と作品」相模書房 1986年)

(一五) 制作する心(「分離派建築会作品第三」岩波書店1924年)

(一六) 創宇社と其の第1回展(雑誌 建築新潮2月号 1924年)

(一七) 創宇社第3回展と吾々の態度(「建築新潮」9月号 1924年)

(一八) 創宇社の第三回展(濱岡周忠 建築新潮9月号 1924年)

(一九) 座談会 建築と演劇(現代日本建築家全集11坂倉順三 山口文象とRIA 1971年)

(二〇) 竹村文庫 <http://members.aol.com/tkmh/>

(二一) 対談:戦前・戦中・戦後(雑誌 建築)1962年 6月号)

(22) 創宇社建築会同人たちのこと(竹村文庫たより8号 1994年)

(23) 文ちゃんと創宇社(建築家山口文象人と作品相模書房 1982年)

(24) 大間・山口文象(私の兄事した建築家)(建築家山口文象人と作品相模書房1982年)

(25) 合理主義反省の要望(国際建築 11月号 1999年)

(26) 戦前の建築運動 宮田吉蔵(風雪)第61号東京解放運動旧友会1978年5月7日)

(27) 張り切っていた山口文象君(建築家山口文象人と作品相模書房1982年)ー前川國男氏へのインタビューをもとに文にしたもの。前川事務所、近藤正一、神子忠、伊達美徳が行ったが、口が重くて閉口した記憶がある。その録音テープを編者が所蔵している。

(28) 創宇社の躍進(瀬田作士(梅田と広瀬 国際建築1930年11月号

(29) ワイメール末期ドイツの日本人・ベルリン反帝グループ関係者一覧(2000年1月1日現在、加藤哲郎作成)

<http://members.com.home.ne.jp/07286711/Berlin.html>

(30) 岡村蚊象と創宇社の時代(建築家山口文象人と作品相模書房1982年)

(31) 講演 建築はどのような体制に流れる建築家ではなく自律的に考える建築家でありたい(建築家)1972年夏季号 日本建築家協会)

(32) ワルター・グロピウス(建築家)1969年秋季号 日本建築家協会

会)

(33) 1977年8月29日の田中俊彦氏宛の書簡(建築家山口文象人と作品相模書房1982年)

(34) 欧州建築界雑誌(建築科学)第4号 1932年11月)

(35) 断章(竹村文庫たより1号 1987年)

(36) 対談 近代建築の目撃者(近代建築の目撃者)新建築社 1977年)

(37) 建築家としての山口文象(建築家山口文象人と作品相模書房1982年)

(38) 日本一タウトの日記1933年(篠田英雄訳(岩波書店刊 1972年)

(39) (ルン文庫の探求(染村絢子 ラフカディオ・ハーンに関する講演記録集 1998年 馬場公園を愛する会)ー染村氏は小泉八雲研究家であり、研究の過程で山口設計の富山高校八雲図書館(82年の大と作品)の年表で、建設されなかったと記した)の図面や竣工写真類を発掘した。

(40) 日本一タウトの日記1934年(篠田英雄訳(岩波書店刊1972年)

(41) 民家の郷愁 山口邸(改訂増補建築家大系38木造設計例) RIA建築総合研究所 彰国者1960年)

(42) RIA所蔵の山口文象事務所スクラップブックにある切り抜き記事(出典不明)

(43) 日本一タウトの日記 1935~1936年(篠田英雄訳(岩波書店刊1972年)

- (44) 豊田川水力発電所(雑誌 国際建築)1938年9月号)
- (45) 堰堤随感(山口文象(雑誌 国際建築)1938年9月号)
- (46) RIAリポート 解説 植田一豊(新建築? 19●●年)
- (47) 鼎談 戦前から戦後(山口文象・三輪正弘・植田一豊(建築文化 1955年9月号)
- (48) 家をつくるにあたって(林芙美子 1951年)
- (49) 芸術家村のこと(建築家山口文象人と作品「相模書房1982年」猪熊源一郎氏のインタビューをもとに文にした。東京田園調布の猪熊自邸で猪熊夫妻と、近藤正一、神子忠、伊達美徳が3時間余を歓談した。そのときの録音テープを編者が所蔵している。
- (50) 山口文象とRIA(建築家山口文象人と作品「相模書房1982年)
- (51) 我々の問題としてのローコスト住宅1 直面せる住宅事情(新建築)1952年10月号)
- (52) RIA1953〜66(RIA 1966年)
- (53) 昨日。今日そして明日(新建築)1955年10月号)
- (54) プランニングにおける思想性(新建築)1966年5月号)
- (55) 地域に根をおろした建築を(建築士)1978年4月号)
- (56) 国際建築1936年11月号
- (57) RIA特集(建築1962 6月号)
- (58) 日本における近代建築の成立(建築文化)1978年8月号)
- (59) 無理な注文(国際建築)1936年)
- (60) 『枝先生と備菴云』(高木金次 日本科学技術史大系月報)2001年10月)

資料を提供していただいた方、引用させていただいた方に厚くお礼を申し上げます。文中に登場する諸氏のお名前に敬称を省略したことをご容赦いただきたい。

(伊達美徳 2003年8月)